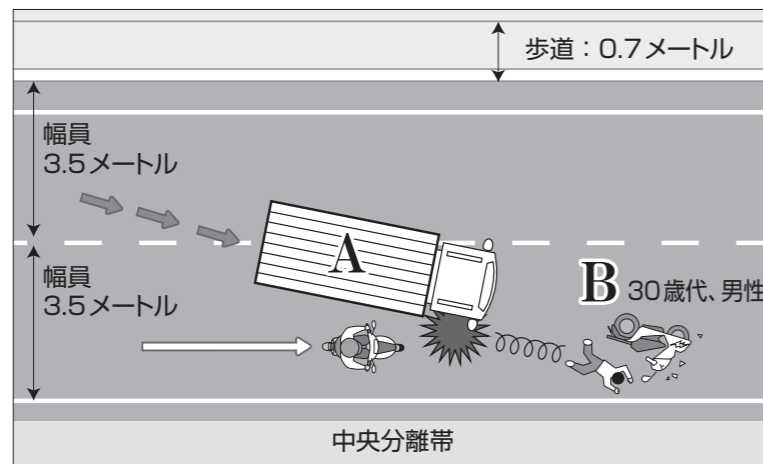


職場における交通安全指導

Part 115

Ⅰ 中型トラックが、進路変更時に直進二輪車に接触



■ 事故の概要

● 事故の当事者

当事者A：運転者（中型貨物車）
40歳代、男性

当事者B：被害者（自動二輪車運転者）
30歳代、男性

● 被害状況

A：運転席ドア部、右前タイヤハウス凹損
B：重傷（右大腿骨骨折及び右肘右手打撲）

● 道路状況

片側2車線の直線道路（主要地方道）

事故状況

中型トラックの乗務経験15年となるAは、これまで無事故を継続している優良ドライバーであった。

事故当日は、横浜から東北方面へ食品原材料搬送の業務を担っていた。

配送先到着予定時間は午前10時だったため、

その時間に遅れないように余裕を持って、午前7時30分に会社を出発し、首都高から東北自動車道に入り、やや渋滞もあって予定時間間近の午前9時45分に配送先付近に到着した。

時間に余裕がないため、ややあせりがある状態での運転であった。

そんな中、片側2車線道路の第1車線を直進中、先の交差点を右折するため、第2車線に進路変更しようと、右にウィンカーを出して、ミラーのみで右後方を確認したところ、かなり後方に乗用車1台が進行しているのを確認した。

Aは、右ミラーに他の車両が写っておらず、視界にも入っていなかったため、第2車線を自車と並走していたBの運転する二輪車には全く気が付かず、車両はいないものと誤信しており、進路変更直前に、再度確認しないまま、第2車線に進路変更を行った。

進路変更して間もなく、運転席ドア付近に衝突した衝撃と音がしたのと同時に、右前方に男性Bと二輪車が滑走して行くのが見えた。Aは、急ブレーキをかけながら「事故をやった」と思った。自車のハザードを点滅させながら停車させ、Bのところ駆け寄ると、Bは右の足と腕を負傷して

いるのが分かり、その場で救急車と警察および会社に連絡した。

Bは救急車で搬送され、右大腿骨骨折及び右肘右手打撲の重傷であった。

事故の原因

事故現場の道路は、片側2車線の主要地方道で、交通量が少ない状態であった。

運転者Aの心理的要因としては、事故現場が配送先の付近であり、予定時間に遅れるかもしれないという、あせる気持ちがあり、自車周辺の走行車両等の安全確認が疎かな状態で走行していた。第1から第2車線への進路変更時に右ウィンカーを出した際に、ミラーのみに頼り、自身で窓から後方を確認するなどを怠り、自車右ミラーの死角にいたBに気が付かず、何もいないと誤信して、運転席ドア下部にBの二輪車前部を衝突させて、転倒滑走させ、右大腿骨骨折等の重傷を負わせた。

安全指導

今回のケースは、進路変更時の対人事故です。この事故のような、あせりの心理的要因から発生する誤信による直接の死角等への確認不足や、漫然運転による運転時の意識不足など、ちょっとした注意不足による接触事故が少ない状況にあります。

進路変更の直接確認不足や漫然運転による事故防止について考察することとします。

① 「進路変更時」の死角に注意

進路変更時は、側方や斜め後方の状況を繰り返し確認することが重要となります。

また、タクシー等は急な進路変更や急ブレーキによる停止行為を行うことがありますので、コメントリー運転を実施するなど安全確認の徹底をしましょう。

② 「渋滞すりぬけ二輪」の蛇行運転に注意

渋滞中は、車両の右や左を蛇行しながらすりぬける二輪車に注意が必要です。極力進路変更をしない、小さな進路変更でも、かもしれないの予測運転を励行しましょう。

③ 「高速道路の合流時」本線走行車に注意

高速道路や自動車専用道路など、自然合流する形態の道路では、本線走行車が連なって走行して来ます。車体が小さな二輪車の見落としをしないよう注意しましょう。

④ 「漫然運転」に注意

交通量の少ない郊外の運転や長距離運転から会社付近へ戻った時や構内など、ほっとしたり、道路外での安堵感などから、漫然運転に陥り易いことがあります。ほっとしたり、ぼんやりした時には、コメントリー運転により、「気をつける」と自分で自分に「声掛け」をしましょう。

結論

人間の脳は、目から得た情報を判断して整理・伝達することよりも、声による耳からの情報の方がより早く、また、漫然に陥らずに正確に伝わるといわれております。

そこで、事故防止のために、コメントリー運転の推奨です。目から得た情報を声に出しコメント（呼称）しながら判断する方法、例えば「左前方に自転車を認めた場合、『左』『自転車』『停止』と自分に注意を促しながら減速し、安全確認ができたなら『よし』と呼称して走行を再開する」などの方法が最適です。是非皆さんも率先してコメントリー運転を実践してください。

